



技術者編

西暦1872年～1882年
圭介40歳～50歳

日本の動き

- 1872年 義務教育の開始
- 1873年 地租改正、徴兵制の開始
- 1874年 江華島事件
- 1875年 廃刀令
- 1877年 西南戦争

圭介の動き

- 1872年 海外へ産業視察に行く
- 1873年 借金して視察を続ける
- 1874年 帰国し「山油編」等を記す
- 1875年 タイへ公式訪問する
- 1882年 工部大学校長になる

偉人の言葉・大鳥圭介評

福沢諭吉: 戊辰戦争では負けたのに優秀さが認められ出世して、偉大な先輩です。



福沢は圭介の適塾の後輩にあたりますが、一緒に学んではいません。しかし明治時代になってからはお互いを認め合い、親交を深めていきました。

西郷隆盛: 圭介どんほど優れた指揮官はおらん。あの人とは戦いたくないでござす。



西郷は圭介が書いた本から兵法を学んでいました。また、西南戦争が始まった時には、「もし圭介が軍を率いてきてはわれらに勝ち目は無い」と言っています。

世界へ



圭介は、後の総理大臣・黒田清隆のおかげで釈放されます。そしてすぐれた語学力を必要とされ、釈放後すぐに「開拓使」として、欧米の産業視察を命じられます。

圭介は石油・石炭・鉄鋼業、家具、ゴム、ウイスキー、にかわ、木酢液、等々の様々な産業を単身で視察して回りました。欧米人は「言葉もわからない日本人が見たり、聞いたりしても何も分からないだろう」と事細かに教えてくれました。

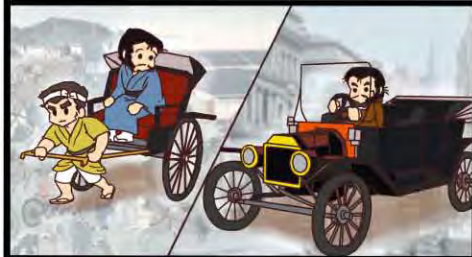
すでに英語を習得し、蘭語でもたくさん洋書を読んでいた圭介は、彼らの説明を全て理解していました。また、視察中はずっとメモを取り続け、寝る間も惜しんで先進国の技術を学びました。

ロンドンの大学で講義を受けるなど、勉強していましたが、政府から帰国を命じられ、滞在費用も無くなりました。しかし、圭介は「日本にはもっと先進国の技術が必要だ」と思い、自ら借金をして滞在を続けました。こうして多くの技術を日本に持ち帰りました。

何故、黒田清隆は圭介の釈放に力を尽くしたのでしょうか？

黒田清隆は圭介の教え子であり、圭介の能力と人柄に深い信用があったからです。欧米諸国より発展が遅かった日本が成長するためには、外国に行って技術を学べる人材が必要でした。圭介は英語・フランス語・オランダ語が話せるだけでなく、科学技術についての知識も深く、まさにうってつけの人物だったのです。そのため黒田は「もし、よそに取られたら手足を引き抜かれるのと同じで非常に困る」と述べています。

北海道にて



圭介はアメリカ・イギリスの産業視察中に世界に比べ日本のレベルが低いことに驚きました。この時の日本にはまだ馬車や人力車しかありませんでしたが、世界では蒸気機関車や自動車が走り回っていたからです。

帰国後、圭介はこれからの日本の産業発展には、石炭や石油などの燃料と鉄が必要不可欠だと思い、開拓使として、まず北海道の炭鉱調査に向かいました。

アメリカ人のライマンや圭介の親友の荒井郁之助らと野宿をしながら調査をし、北海道の地図や石炭の鉱脈の図を作りました。その時、北海道の名前の無い川に「大鳥川」と「荒井川」という名前がつけられました。

ついで圭介は長野・新潟などの石油を調査し、石炭や石油の調査結果を踏まえ、エネルギーとなる石炭、石油について「石炭編」「山油編」など産業発展において重要な本を何冊も出版しました。

完成したのに



明治10年2月、薩摩（現在の鹿児島県）で起こった西郷隆盛の反乱（西南戦争）で明治政府軍の熊本城が西郷軍に包囲され孤立しました。

戊辰戦争で敗れたものの、最新の兵術を身に付けていた圭介が、明治政府に仕えていることを知っている西郷らは「圭介が兵を率いてやってきたら勝ち目は無い…」と心配していました。

このとき、工部省工作局長の圭介は熊本城への物資輸送と連絡をとる為、圭介が監督をしていた工部大学校の学生達に命じ、急いで気球を作らせました。

気球は2週間で完成し試験飛行にも成功しました。しかし、別の方法で熊本城との連絡が可能になったので気球は使われませんでした。圭介は、この戦争で切腹した西郷隆盛のことを悲しく思って漢詩を作りました。

なぜ圭介は北海道の開拓使に選ばれたのでしょうか？

A 圭介は戊辰戦争で五稜郭に拠った時に、函館から江差までを歩き回って陣地を考えており、北海道について詳しく知っていたからです。また、この時すでに北海道の産業についての構想も練っていました。どんな時でも、好奇心を持って色々な事を調べていた経験が、後に生きてきたのです。

気球やカメラの他に圭介が日本で初めて作ったものは何があるのでしょうか？

A 金属活字印刷（大鳥活字）、噴水、蒸気船模型、温度計等の様々なものを日本で初めて作りました。また、目に見える物だけでなく、ダーウィンの「種の起源」を日本人で初めて読み、解説し数々の用語を作りました。今では普通に使っている「進化」という言葉も、大鳥圭介が作ったという説もあります。